

散策ボストン美術館 — われわれはどこへ行くのか —

— 「ミネルヴァの女神」との出会い —

ゴールデンウィーク明け早々、所用でボストンに出張した。仕事の合間たまたまボストン美術館を訪ねたが、そこで思いがけない出会いに恵まれた。

ボストン美術館はいうまでもなく、ルーブル（パリ）、メトロポリタン（ニューヨーク）、エルミタージュ（サンクトペテルブルク）と並ぶ世界有数の美術館である。ルーブルやメトロポリタンと比べるとやや小振りだが、古代ギリシャ・ローマ美術、中国美術、ヨーロッパ・アメリカ美術などを豊富に揃え、特にモネ、ルノアール、マネなどの印象派の作品が有名である。

最初の小さな出会いは、ミネルヴァの女神との出会いである。

それは2階の通路添いに陳列された数多くのブロンズ像の中にひっそりと置かれていた。ミネルヴァはローマ神話の女神でラテン民族の神となり、カピトリウム丘に奉られた。高さ20センチほどのこのブロンズ像は、紀元1、2世紀頃に製作されたものらしい。ミネルヴァの女神は知恵の象徴であるフクロウを従えている。

ドイツ観念論の完成者ヘーゲルの『法の哲学』の序文には「ミネルヴァのふくろうは黄昏とともに飛び始める」という有名なエピグラムが記されている。黄昏も深く暗闇が迫るときになって、人は初めて知的成熟に至る。歴史の教訓を思い知る。だが、もうその時では遅い。ヘーゲルはこう言って、人間がいかに歴史の教訓を学ぶのに遅いかを嘆いた（ただし、解釈に諸説あり）。

50代になり人生の黄昏が近くなつて、わたしもさまざまな事象の背後にあるものが明晰な輪郭をもつて見え始めてきた。人生経験を重ねてやつと自分なりの哲学、世界観が見え始めてきた……。

そんな想いがあるものだから、思いがけなくミネルヴァの像に会つて、わたしはちょっとウキウキした気分になった。思いがけなくも懐かしい友に再会した思いである。

— 心の平安を追求した「笑う哲人」 —

さらに散策を続けると、偶然デモクリトスに会つた。

デモクリトスは、古代ギリシャの哲学者で、「笑う哲人」といわれた。彼は心の平安、謙譲、樂しみ及び知恵（tranquility, moderation, pleasure and wisdom）の追求を人生の目的としたと説明文にある。

デモクリトスの像に接したのはこれが初めてだったので、これもまたわたしには楽しい出

会いだった。この頭部像は、長く他の哲人のものと思われていたが、最近になりデモクリトスの像とされるようになった。

わたしのイメージしていたデモクリトスは、もっと肥った丸顔の穏和な顔立ちだが、この像を見ると意外に細面で精悍で端正な顔をしている。その意外さも面白かった。

——ゴーギャンの問いかけ——

さて、ボストン美術館での思いがけない収穫は、ゴーギャンの絵であった。

音楽に比べると、絵画は善し悪しの判断が難しい。音楽は直接人間の感性に働きかけるが、絵画のそれは間接的である。20代、30代の頃は絵画の善し悪しも分からず、自分の好みさえ分からなかつた。有名な絵と聞くと「なるほどこれがいい絵なのか」と感心するあります。

だが、40代の半ばを過ぎてから、絵画に対する好みがはっきりしてきた。今では世間的な評判がどうであろうと、自分の感覚に合うものは好きだし、感覚に合わないものは嫌いである。

そういう意味では、ゴーギャンは今までわたしの視野には全く入っていなかった。大体があのけばけばした、それでいてダークな色彩感覚が嫌いだつたし、ボテボテした人物の描き方も表情も疎ましかつた。だから、美術館巡りをする時も、ゴーギャンの絵は素通りするのが今迄のわたしのやり方だった。

ところが今回はちょっと勝手が違つた。ゴーギャンの最高傑作「Where do we come from? What are we? Where are we going?」が陳列されていたからである。この作品の出来よりも、わたしはその哲学的タイトルに興味をそそられた。われわれはどこから来たのか?われわれは何者か?われわれはどこへ行くのか?この疑問こそは、まさに哲学の根本命題である。

そういうわけで、わたしは初めて真剣にゴーギャンの絵を鑑賞する気になった。

ここで簡単に彼をスケッチしてみよう。フランス後期印象派の画家、ポール・ゴーギャンは1848年6月パリに生まれ、1903年5月マルケサス諸島のヒバ・オアで没した。幼児期を南米ペルーで過ごし、長じて水夫として商船に乗り込み、その後パリの株式仲買商の店員として勤務。30代半ばで画家になることを決意。40代半ばにタヒチに移つたが、幻滅を味わい一旦帰国。その後再びタヒチに移住。タヒチ時代の作品は、タヒチの風俗の忠実な描写ではなく、楽園神話を求めたゴーギャンの内面を色濃く投影したものといわれている。

ゴーギャンの大作は、ヨーロッパ絵画部門の目玉商品だった。

絵そのものは例によって、憂鬱で決して心地よい印象ではない。それもそのはず、この絵を描いた当時、ゴーギャンは自殺の思いに捕らわれていた。ゴーギャン 49 才の頃である。彼は今生の最期の記念に、昼夜を問わずまるで熱に浮かされたようにこの作品を描き続けた。彼自身認めるとおり、この絵はひどく粗けずりで完成度は低い。ゴーギャンはこの絵を描いてしばらくして自殺を図るが、未遂に終わる。

——われわれはどこから来たのか？——

出来映えは決して良いとは思えないが、この絵は寓意に満ちている。右から左へ一つの物語をなしている。

右下には赤子が眠り、その左には3人の女が座っている。中央には果物をもぎ取るため両手を高く伸ばした女の姿があり、その足下では子どもが座って果物を食べている。その左には青い偶像が描かれているが、それは彼岸を象徴する。そして一番左隅には、死の淵にある老婆が頬杖をついて座っている。この絵は人間の一生を象徴する様である。

われわれはどこから来たのか？ゴーギャンは問いかける。昼下がりの一時であろうか、ぐっすりと眠る赤子は幼かった日へのノスタルジアをかきたてる。だが、赤子はどこから来たのか？父母から？父母はどこから来たのか？それぞれの祖父母から？では、その先は？そのまた先は？と問い合わせていけば、沈黙する他はない。

——「自己発見の旅」は壮大な徒労である——

われわれは何者なのか？次にゴーギャンは問う。これこそ多くの若者を捉えてやまない疑問であろう。果てしない自己発見の旅が始まる。自分の名前、学歴、職業、経歴をいくら並べても、そんなものはうわべだけの飾り物に過ぎない。それは「わたし」の本質ではない。

かといって自己の内面を覗くのは玉葱の皮を剥くようなもの。いくら剥いでも、中に芯など何もない。

わたしは今も生きるまっただ中にいる。わたしの生きる哲学も人生観も世界観も、そしてわたしの倫理観も常に変化している。わたしの人生はまだ未完なのだ。内面を見つめれば、自分が発見できるというのは幻想である。本当の自分など有りはしない。

敢えていえば「わたしはわたし流の思考と感性と行動の総体である」という以上の答は思い浮かばない。「わたし」を尋ねる作業は空しい作業である。

われわれは何者なのか？このような問いかけもせずに、日々を無為のうちに暮らすのは、自覚的に生きているとはいえない。青年期にゴーギャンの問いを深く考えないようでは薄っぺらな人間にしかなれない。だが中年になってもこのような問いを引きずって考えすぎ

することは愚かである。青年期はまだ体力もあり精神的にも弾性があるから深く考えることも意味がある。だが、中年を過ぎれば体力もなく精神さえ弾性を失ってしまう。考えすぎれば知の迷宮をさまよい歩くだけの人生に終わってしまう。

この世は複雑多岐であり、正解がある問い合わせもあるし、ない問い合わせもある。正解のない問い合わせを求めてのたうち回っても、自ら傷つくだけに終わってしまう。知的好奇心も、適度の抑制をしないと、よく生きることはできない。

— 心のうちに平安を求める —

さて、最後の問い合わせ。われわれはどこへ行くのか？ゴーギャンは楽園を夢みた。

彼は文明から逃れ、シンプルな生活スタイルを求めて再びタヒチに移住した。タヒチに楽園を求めたが、結局、それは幻想に終わった。

50代の始め、わたしも激しく引退を夢みた。だが、引退したからといって安穏な世界が待っているわけでは決してない。引退した後には引退した後の現実がある。人間は一生を通じて運命の矛盾と不条理に直面せざるを得ない。有りもしないユートピアを求め、それが見つからないからといって憂鬱の虫に捕らわれてはならない。

将来のことを考えすぎてはならない。何故ならば、誰もが経験的に知っているように、世の中のことは大きな偶然が作用しており、偶然の作用は決して見過ごすことが出来ないほど人生に大きな影響力を及ぼす。だから、せいぜい近い将来のことを考える意味はあっても、遠い将来のことなど思い煩うさえ無駄である。

だから、深く考えることは大切だが、現在を楽しむことはもっと大切である。考えることも考えないことも、同じように大切である。

外にユートピアを求めれば、必ず幻滅する。外に求めるのではなく、ゴーギャンは自分の心の内に平安を求めるべきであったろう。ソクラテスもデモクリトスも仏陀もそのことを遙か昔に知っていたが、それから2000年の時を経ても、ゴーギャンは先人の思索の果実を味わうことはなかった。

人生の黄昏も近く、ミネルヴァのふくろうが飛ぶ夕暮れになっても、ゴーギャンは心の平安を保てなかつた。そして彼は不遇と絶望のうちに54才で死んだ。

写真はミネルヴァの立像、デモクリトスの頭像